

第6回

身のまわりの音を取り込む ～日本の音楽（1）～

学習のねらい

自然音や生活音など、私たちの身のまわりの音と日本の音楽がどうつながっているのかを、おもに江戸時代に生まれた音楽から探ります。歌舞伎で情景描写に使われる音や、身近な音を三味線や箏の音楽に取り入れて洗練させた表現の例を聴き、古い時代の身のまわりの音が、今も日本の音楽の中に生き続けていることを考えます。



講師
塚原 康子

日本音楽の中の身近な音の表現を聴く

今回は「身のまわりの音を取り込む」というテーマで、日本の音楽とのつながりを考えます。まず、歌舞伎で芝居の情景を表すのに使われる音楽の例を聴きます。これらの音楽は、舞台上の「黒御簾」という小部屋で演奏されます。

最初の曲は《雷鳴と雨音》を大太鼓で表したものです。2曲目は、江戸の隅田川を行き交う船で弾かれた三味線の旋律を取り込んだ《佃合方》で、大太鼓の《波音》を重ねています。水辺の情景を表す音として歌舞伎で今も使われますが、現在この旋律を日常音として聞くことはありません。

このように、私たちの身のまわりの音は地域や時代によって違ってきます。自然音のように変わらず響く音もあれば、時代の変化とともに消えてしまった音や新しく加わった音もあります。最初の2曲は、身近な音を楽器で模倣したタイプのもので、現実には存在しない音をそれらしく工夫した音楽もあります。

たとえば、歌舞伎で怨霊や幽霊が登場する場面に使われる《ドロネトリ》や、雪の降る音を表現した《雪音》などです。この《雪音》に、地歌の《雪》の間奏からとった三味線の旋律を重ねたものが《雪合方》です。

音楽に取り込まれ洗練された音の表現を知る

次に、身近な音を素材にして、表現を練り上げた音楽を2曲紹介します。まず、長唄《秋色あきいろ種くさね》の中の「虫の合方」です。長唄は、唄と三味線からなる歌舞伎に欠かせない音楽として、江戸時代から発達しました。打楽器や笛からなる囃子が付くこともあり、踊りの伴奏にも芝居

の情景描写にも演奏されます。19世紀になると、歌舞伎と関係なく音楽だけを鑑賞する「お座敷長唄」も作られますが、《秋色種》はその代表曲です。麻布界隈の秋の風趣を歌い込み、「松虫の音ぞ」という歌詞の後、三味線だけの「虫の合方」になり、「楽しき」と受けます。上調子という調子を高くした三味線の別旋律も加わり、合奏の効果を高めます。

この曲は1845年南部家の殿様の屋敷の新築祝いに初演されました。作曲者は十世杵屋六左衛門です。

もう一つは、布地を川水にさらす様子を、独特のリズミカルな音型の繰り返して表現した「さらし」です。「さらし」の音型はいろいろなジャンルに器乐的表現の素材として取り入れられています。今回は山田流箏曲の《晒》から、三味線と箏による「さらし」の一部を聴きます。この曲をさらに即興的に発展させた超絶技巧の曲や、「さらし」の音型をモチーフにした現代曲も作られています。

身のまわりの音と音楽とのつながりを考える

メディアが発達した現代では、音を時間や空間を越えて運んだり届けたりすることが当たり前になっています。ですが、音は本来、響いたその場・その時にしか聞けないものでした。日本の音楽の中には、ある時代の日常の響きを声や楽器で再現したり、身近な音を素材にして洗練した音楽に仕立てたりしたものがありません。それによって、かつて存在した音や、当時の音感覚を、地域や時代を越えて今に伝えてくれているのです。もっとも、これは日本の音楽に限ったことではありません。

今回は紹介しませんが、その当時のやり歌や別のジャンルの歌をうまく音楽に取り入れたものもあります。現在、身のまわりで聞こえている音も時代が進む中で消えたり、音楽に取り込まれて意外に長く残ったりするのかもしれませんが。

ワードファイル

くろみす
黒御簾……………歌舞伎で芝居の進行に合わせ情景描写の音楽などを奏する舞台下手の小部屋。
じうた
地歌……………江戸時代に関西で発展した三味線伴奏歌曲。おもに座敷で演奏された。
ざしきながうた
お座敷長唄……………歌舞伎と関係なく、音楽だけを鑑賞するために作られた長唄。

♪ 今回取り上げる曲 ♪♪

●歌舞伎の情景を表す音楽
「雷鳴と雨音」
「佃相方」+「波音」
「ドロネトリ」
「雪音」
「雪合方」

●長唄
「秋色種」から「虫の合方」
●山田流箏曲 「晒」から

このページの文書・画像の無断転載及び商用利用を固く禁じます。